構成が強く見られる場合においても、１単位のみを違えて対称性を嫌うという、加曽利Ｅ的な原理が守られている状況が把握された。もともと、対称性を嫌う現象は、２に見られるように勝坂式の大原則であるが、単位数を増やしていく加曽利Ｅ式では、少なくとも１単位を崩すという構成へ変化していく。従って、まま上遺跡第５ｃ号住居跡出土の土器群は、全体としてこの中間的な様相を兼ね備えており、まさに勝坂式終末期から加曽利ＥⅠ式成立期への移行期の状況を示していると評価される。また、文様要素の分析からも、勝坂式、大木８ａ式、加曽利Ｅ式が融合していることが分析され、まさに、武蔵野台地の山間周縁部という、この地域における加曽利Ｅ式成立期の様相を時空的な側面で具現化しているものと評価されるのである。

従って、他の地域には、他の地域における土器群の組み合わせや、構成原理が働いていることが予想され、一様に土器群を理解し得ないのが現状であり、また、その関係性の分析こそが重要であることを認識させられるのである。確実に土器群が共伴関係にない場合でも、その平行関係の可能性を把握する手段として、関係性の分析こそが必要にして不可欠な条件であることを改めて指摘しておきたい。

２　加曽利ＥⅠ式成立期における土器群の再検討

前項における単位構成の検討から、まま上遺跡第５ｃ号住居跡出土の一括土器群は、加曽利ＥⅠ式初頭段階の良好な土器群で、勝坂式終末及び大木８ａ式等との複雑な交渉関係を持っていることが浮き彫りにされてきた。ここでは、各地域の住居跡出土一括土器群の具体的な様相と比較検討することによって、また、新知見等を加えることによって、加曽利ＥⅠ式成立期の編年的な問題について、ささやかながら再検討を加えてみたいと思う。

加曽利ＥⅠ式成立期において問題となってきたことは、西部関東においては勝坂式終末土器群との関係、東部関東においては中峠式との関係、北関東においてはその成立母体と考えられる大木８ａ式との関係であった。まま上遺跡が埼玉県の武蔵野台地上に立地し、関東でも西部地区に含まれることから、とりわけ勝坂式との関係を主体として検討するが、当地域においても中峠式や大木８ａ式の影響が大きく反映していることは言を待たない。

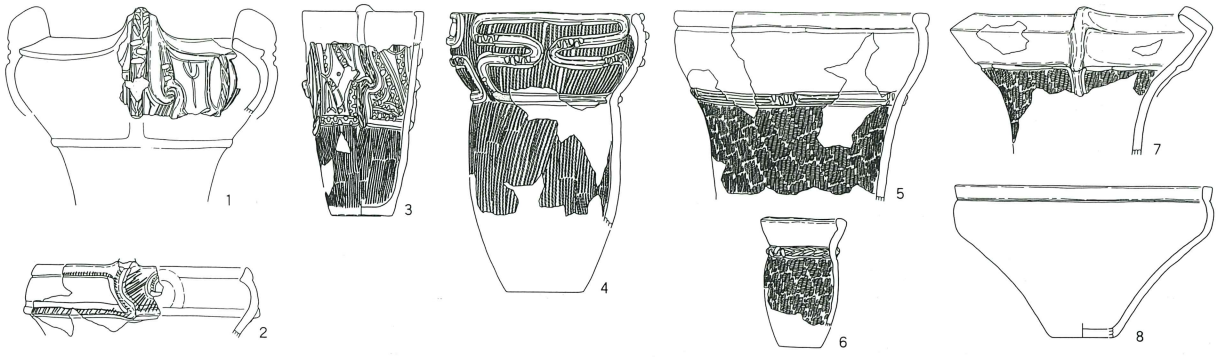
また、西部地域においても勝坂式の終末と認識されてきた多喜窪タイプの土器群と、井戸尻Ⅱ式、Ⅲ式との関係が問題とされ、1982年の「縄文中期土器群の再編」（谷井1982）では、井戸尻Ⅱ式、多喜窪タイプのラインを中峠式段階として、加曽利ＥⅠ式成立以前と編年付けた。そして、井戸尻Ⅲ式は加曽利ＥⅠ式古段階に並行する土器群と解釈することによって、勝坂式の最終末と、加曽利ＥⅠ式の古段階との関係を清算してきた。

今日、事業団編年は大きな流れとしては大過ないものと考えているが、実際に想定した土器群に今日的な解釈を加味すると、周辺土器群とのすり合わせに若干の修正の必要が生じているものも存在する。ここでは、特に、多喜窪タイプの土器群との関係について、少々再検討を試みたい。なお、ここで、関連資料として掲載した土器群は縮尺を全て10分の１に統一してある。拓本に関しては10分の１と６分の１の両者がある。また、説明の都合上、まま上遺跡出土土器の番号は考察図版用に振り替えてある。

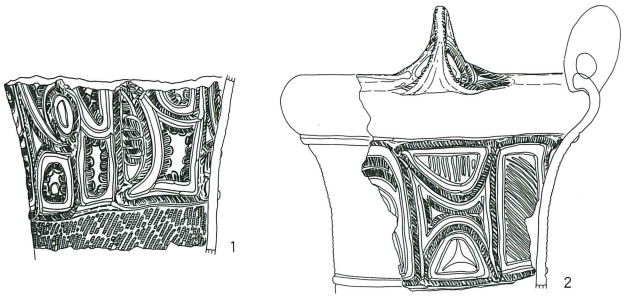
（１）まま上遺跡の様相

周辺地域の土器群との検討を行う前に、まず、まま上遺跡の土器群を復習しておきたい。まま上遺跡で、勝坂式終末から加曽利ＥⅠ式初頭期の土器群を出土する住居跡は、第２号住居跡（第３図１～８）と第５ｃ号住居跡（第３図１～22）である。

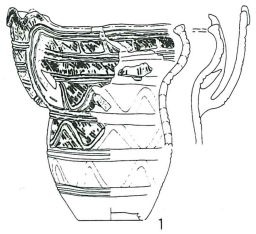
第３図　埼玉県西部地区の土器群（1）



まま上　2 住



まま上　5a 住



白綾　3 次



まま上　5c 住

第２号住居跡は破片復元の土器が多いが、井戸尻Ⅱ式と多喜窪タイプの折衷的な土器（１、７）がある。器形及び文様帯構成からさらに分類が必要とされるが、説明の都合上、ここでは大きく多喜窪タイプとして纏めておく。また、勝坂式終末特有の円筒形土器（３）があり、円筒タイプとする。さらに、キャリパー形のキャリパータイプ（４、５）、頸部が括れて無文の口縁部を持ち、胴部が張る甕形タイプ（６）が存在する。破片では加曽利ＥⅠ式古段階の土器群が出土しているが、明瞭な形で加曽利ＥⅠ式を伴わない組成で、その位置付けが問題となるが、後に詳しく述べたい。

第５ａ号住居跡出土土器は、調査的に第５ｃ号住居跡と明確に区分し得ないが、１は炉体土器である。２は第５ｃ号住居跡の床面下から出土している。何れも区画内充填要素に集合沈線や、爪形文等を施文しており、第５ｃ号住居跡より古相を持っている。井戸尻Ⅰ式段階、もしくはⅡ式段階に位置付けられよう。

第５ｃ号住居跡出土土器は沈線文描出の勝坂系土器（２、４～６）、甕形タイプ（１、３）、キャリパータイプ（９）、円筒タイプ（７、８、10～14）と、加曽利ＥⅠ式キャリパータイプ（15～18）、頸部が括れ、胴部が張り、半截竹管の重複施文沈線を施文する東関東タイプ（16、20）が存在する。破片資料は共伴度の高い土器群を抽出したが、混じりの可能性が無いことも無い。１が炉体土器で、２～５、14～17は一括出土である。単位構成の分析で細かく検討したが、１、15～17は構造的な関係が強く、特に、15は、口縁部のモチーフと器形に井戸尻Ⅱ式系の櫛形文の系統を引き、胴部の多段構成に井戸尻Ⅲ式の、胴部モチーフに大木８ａ式の影響をそれぞれ受けていることが看取された。16も胴部の多段構成と、モチーフ構成に同様の影響を指摘できる。

毛呂山町の北東部に当たる越辺川右岸の白綾遺跡第３次調査（木村1995）では、遺物集中地点２から大変に興味深い土器が出土している。それは、第３図１の土器で、キャリパー形の器形に筒型の把手が一箇所付き、口縁部文様帯と胴部文様帯が都合６帯に横位分割されるものである。分割線は半截竹管の重複施文による３本沈線を使用しており、胴部文様帯内は同種沈線で鋸歯状文を多段に施文する。口縁部文様帯は２帯に分帯し、上段に勝坂式終末特有の上下交互からの切込みを入れる区画文を施文し、縄文を施す。胴部モチーフ等勝坂系の要素を多くもつが、多段、及び波状文構成等まま上遺跡第５ｃ号住居跡15と共通する部分が多い。白綾遺跡の１は、所謂中峠式段階と認識されるのが妥当と思われるが、沈線の使用法や形成等、加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けられる可能性も十分ある。この土器の存在によって、第５ｃ号住居跡１、15、16の説明が妥当性を帯びてくものと思われる。

また、所謂勝坂系の土器群で、第５号住居跡２の様な三角区画内に沈線モチーフを充填するタイプは、渦巻文のモチーフが重弧文へと変化する要素を持ち、やや多重化し、６単位構成を採る土器が狭山市宮地遺跡（小林1988）から出土している。円筒形タイプの土器で、土器群の組み合わせ等は不明であるが、加曽利ＥⅠ式古段階の可能性が高い。同様なモチーフを、キャリパー形深鉢の胴部文様帯に施文する土器は、神奈川県横浜市の大熊仲町遺跡（坂上2000）第33号住居跡から出土している。若干新しい様相を持つが、加曽利ＥⅠ式古段階の土器と共に出土している。両類似例と比較して、まま上遺跡例の方が若干古相を帯びているが、認識される段階としては同一段階と捉えておきたい。

さらに、勝坂式終末の隆帯主導型のモチーフ構成の土器群は、円筒形タイプが主体となるが、区画内の充填要素が簡略化されていることが指摘される。区画内に爪形文を沿わせる沈線加飾は非常に少なくなる傾向にある。また、三叉文等も印刻状ではなく、沈線化する点に特徴が窺える。

この様に、第５ｃ号住居跡出土土器群は多種多彩な内容を持ち、他遺跡の土器群との比較検討に重要な要素を提供している。この土器群の一括性としての評価は分かれるとしても、該期土器群の組成、地域的な欠落要素、時間的な差異等の検討材料として重要な基準を提供しているものと評価されよう。実際、第５ｃ号

住居跡には、第２号住居跡の様な多喜窪タイプの土器群が含まれておらず、それが時間差を意味するのか、系統差を意味しているのかが問題となるところである。事業団編年では多喜窪タイプの土器群は、加曽利ＥⅠ式土器と殆ど共伴しないことから、井戸尻Ⅱ式、所謂中峠式段階に位置付けてきた。その意味から、まま上遺跡第２号住居跡出土土器群は加曽利ＥⅠ式以前に位置付けられるべきであるが、近年の調査事例から再検討の必要も迫られている。

（２）多喜窪タイプの再検討

まま上遺跡第２号住居跡１と類似する多喜窪タイプの土器は、飯能市加能里遺跡（富元1998）や中郷遺跡（柳戸1998）で出土している。多喜窪タイプとしたものは、口縁部の湾曲が強い櫛形文系及び褶曲文系土器の器形と、口縁部の屈曲が強く底部が算盤玉状を呈する器形で立体的な装飾を施すものの二者があり、通常後者を多喜窪タイプと呼んでいる。ここでは、櫛形文系土器と多喜窪系土器との折衷的な土器群も多く存在することから、多喜窪タイプと総称しておく。

加能里遺跡第20号住居跡（第４図１、２）では、１の多喜窪タイプと２の加曽利ＥⅠ式土器が共伴している。１と２の口縁部の造りが類似しており、型式学的にも同一段階の土器群として認定される。１の口縁部モチーフは、把手両脇に上下に連なって垂下するＳ字状の隆帯を配し、中央部に下から巻き上がる隆帯渦巻文を配する構成を採る。渦巻文や隆帯文に見られる刻みは、肩部分に施文することを特徴とする。区画の余白には足の長い沈線三叉文を充填施文し、比較的簡略化した文様帯構成を持っている。底部の膨らみには、背割れ隆帯の櫛形文を施文する。２は対向する２単位の把手を中心として口縁部文様帯を２分割し、区画内に横Ｓ字状文を２単位づつ４単位連結する構成を採るが、１箇所だけＳ字状とはならず、対称性を嫌っている。円筒形タイプ３、４では隆帯のモチーフと余白に交互刺突文を持つ平行沈線や、三叉文等を施文しており、やや繁縟な構成を持つ。加能里遺跡第20号住居跡出土土器の共伴関係は確実なもので、加曽利ＥⅠ式古段階における、当地域の良好な土器組成と認定される。まま上遺跡第２号住居跡１は、加能里遺跡第20号住居跡１と、口縁部のモチーフ構成等良く類似し、加曽利ＥⅠ式段階に位置付けられる蓋然が高い。また、まま上遺跡第２号住居跡７は口縁部が強く屈曲して胴部に縄文を施し、口縁部から垂下する隆帯が底部付近で渦を巻くものと思われる。従って、狭義の多喜窪タイプとなるが、１、７は覆土出土のため調査における時間差は認識し得ない。

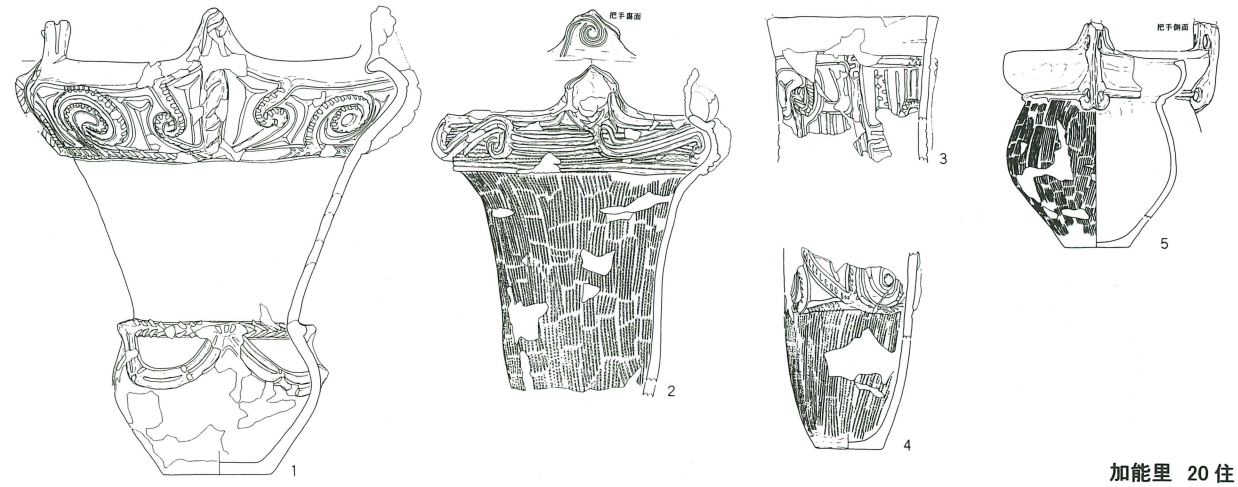
また、同じ飯能市内の中郷遺跡第８号住居跡からは、該期土器群の良好な一括資料が出土している（第５図１～21）。15～19の加曽利ＥⅠ式古段階の土器群と共に、多喜窪タイプの土器群（１～４）、円筒形タイプ（９～14）、勝坂系土器（５、６）、東関東系タイプ（18）が出土しており、良好な土器組成を示している。この住居跡は地山の崩落土の様な覆土でパックされており、廃棄時の一括性は保証されている。多喜窪タイプに見られる、区画内充填文の簡素化や、隆帯肩部に施す刻み、幅広の半隆起状の隆帯等、まま上遺跡第２号住居跡１、加能里遺跡第20号住居跡１と酷似する。これ等の事例を以って、埼玉西部の山間部に近い地域における加曽利ＥⅠ式古段階の土器組成が把握される。

さらに、多喜窪タイプと加曽利ＥⅠ式古段階の良好な共伴関係は、飯能市と隣接する青梅市駒木野遺跡（伊藤1998）第26ｂ号住居跡（第５図１～９）で確認される。１が炉体土器の加曽利ＥⅠ式古段階の土器、２～９が覆土一括出土土器である。３、４は多喜窪タイプで、３が典型例である。４は褶曲文的なモチーフ構成と、底部の対弧状モチーフを持つもので、底部モチーフが樽形土器５の胴部モチーフと共通する。東関東系タイプ７と円筒形タイプ８が伴出しており、多喜窪タイプを含む勝坂系を除くと、まま上遺跡第５ｃ号住居跡の様相と大変類似している。逆に、この一括資料の中から、加曽利Ｅ系の土器群を除くと、従来ならば所謂中峠式段階、つまり加曽利ＥⅠ式成立以前の土器群と把握される土器群であろう。この住居跡も炉体土器

第４図　埼玉県西部地区の土器群（2）

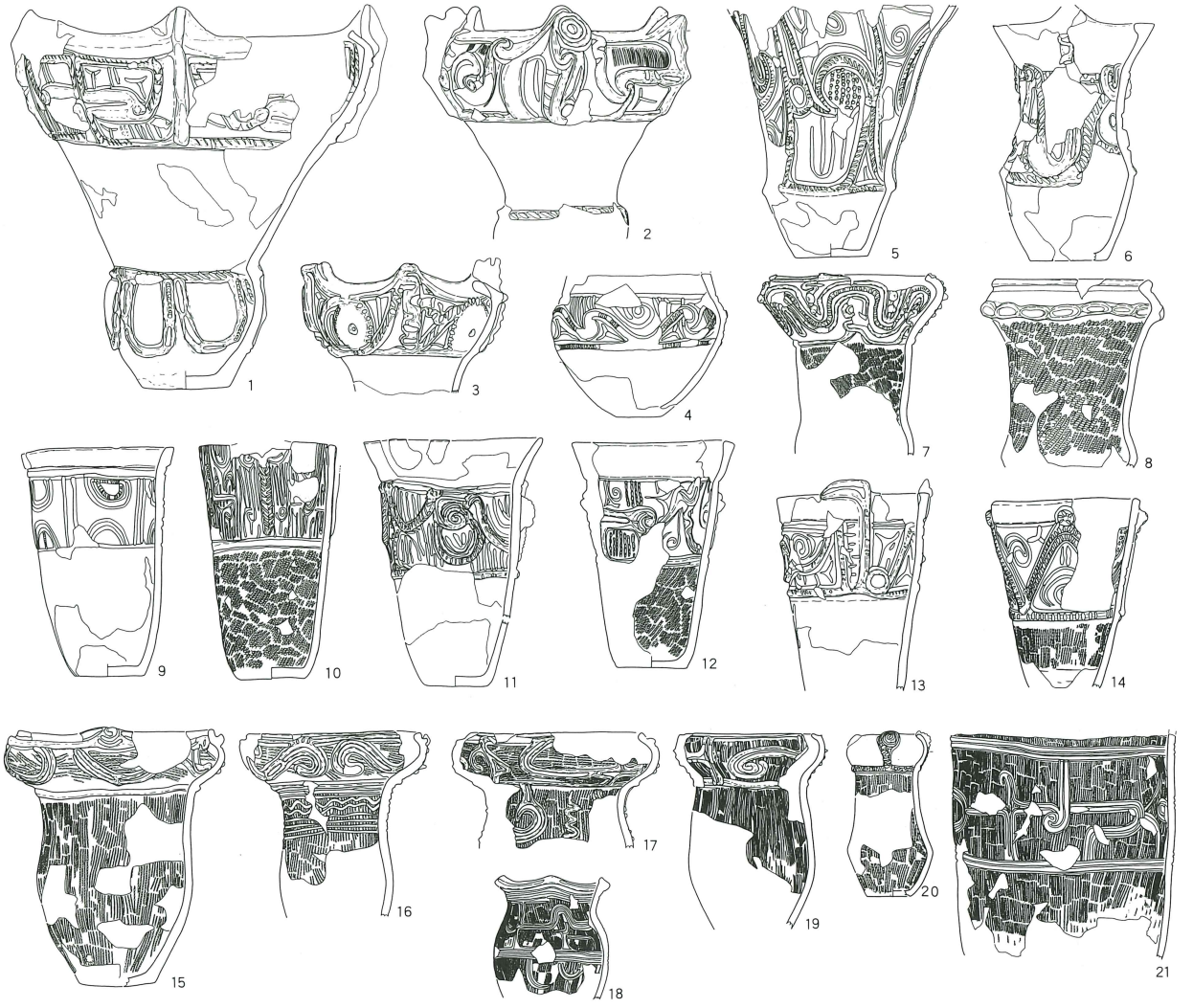


加能里　21 住

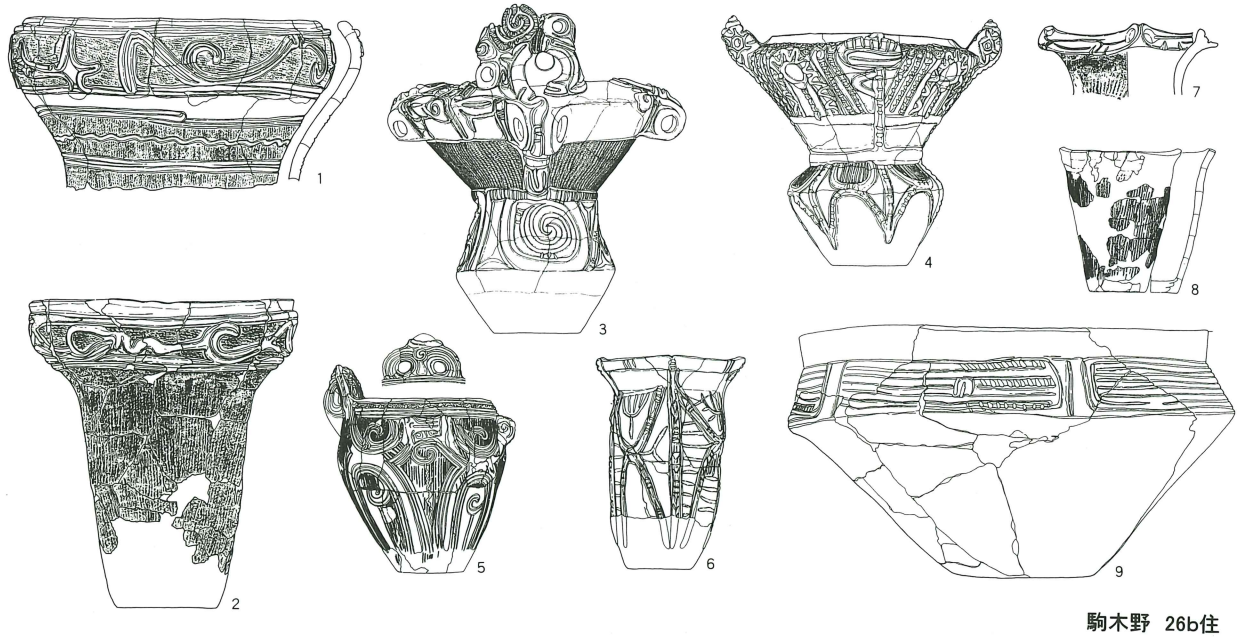


加能里　20 住

第５図　埼玉県西部地区（3）・東京都西部地区の土器群（1）

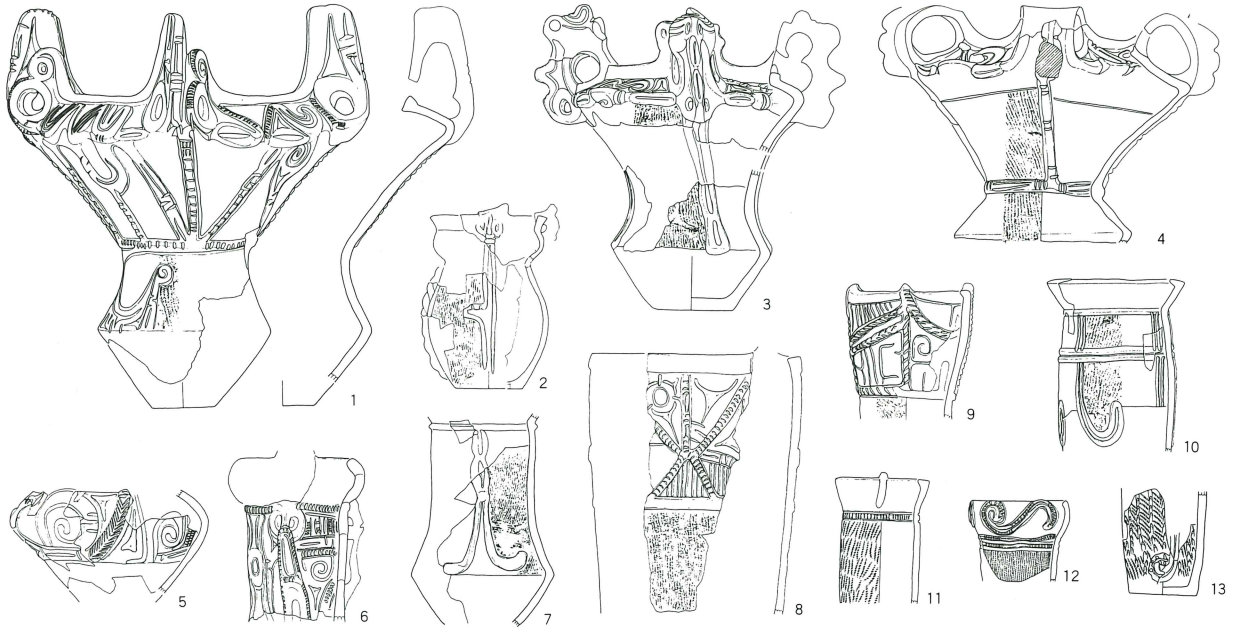


中郷　8住

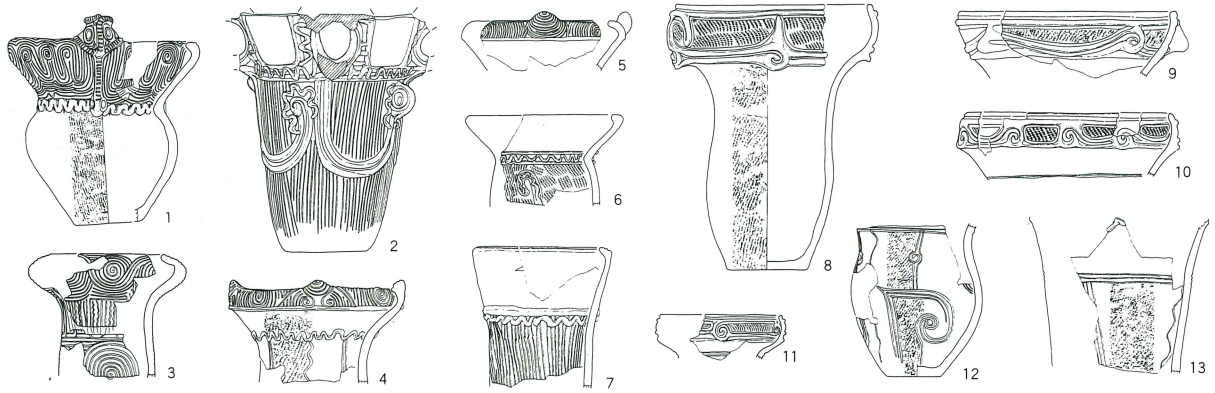


駒木野　26b住

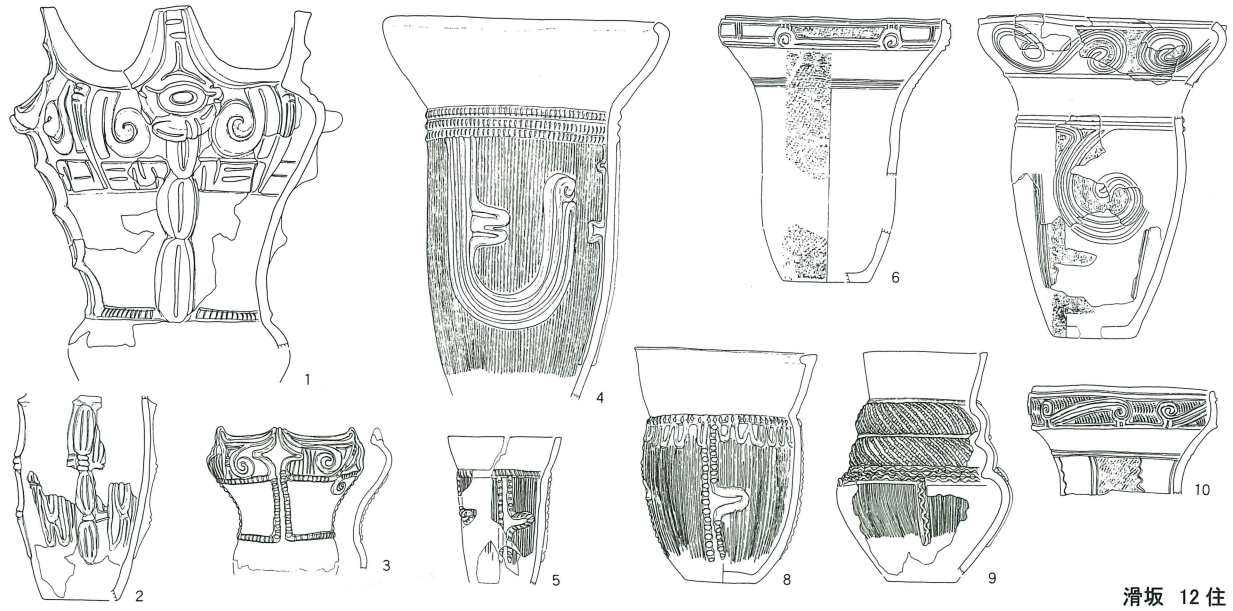
第６図　東京都西部地区の土器群（2）



滑坂　69 住

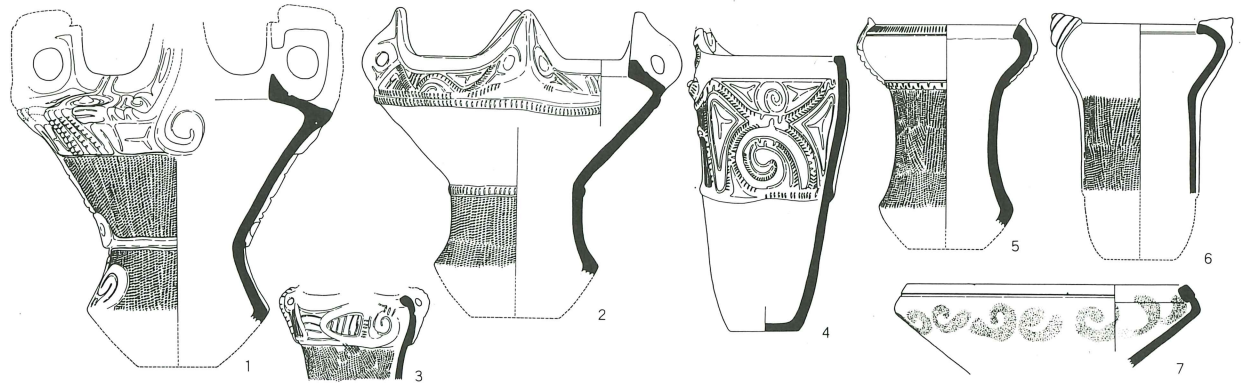


滑坂　34 住

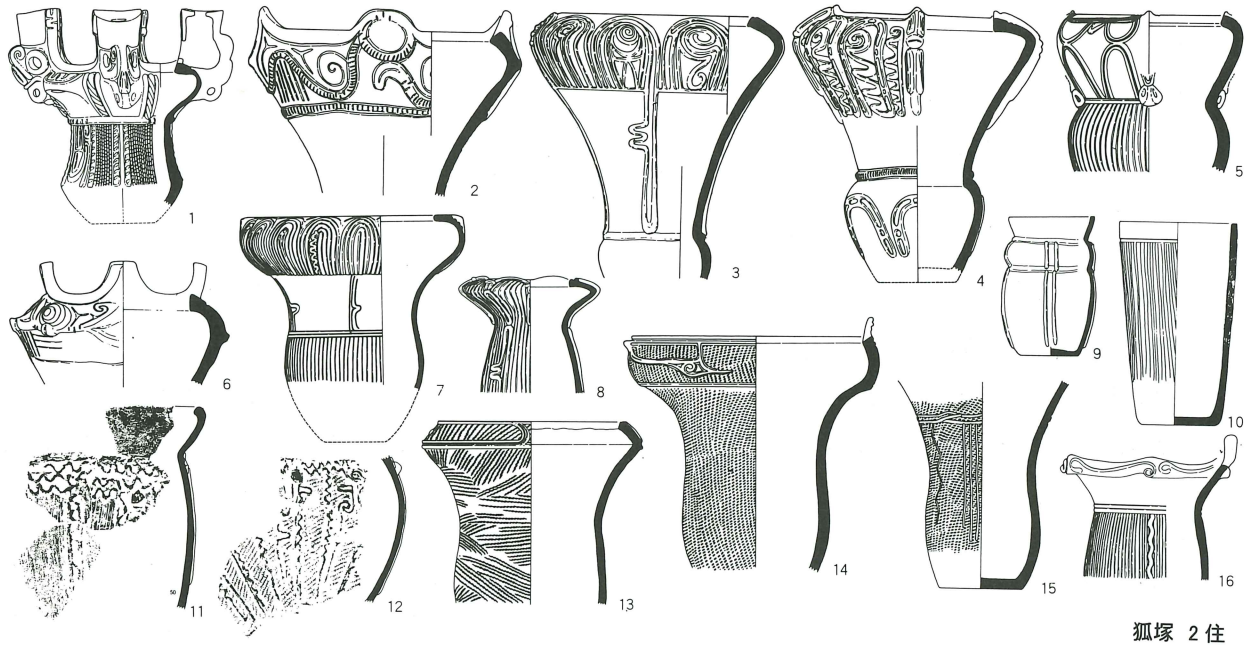


滑坂　12 住

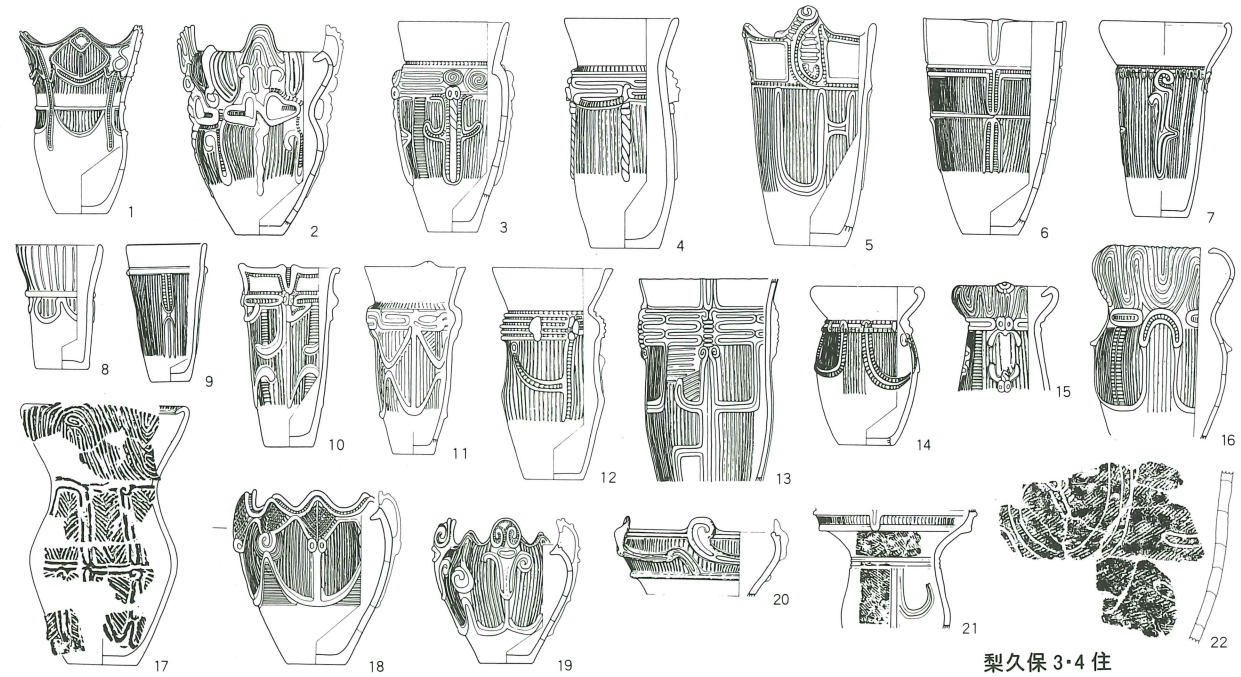
第７図　東京都西部地区（3）・長野県の土器群



狐塚 3住



狐塚 2住



梨久保 3･4住

と覆土一括土器群の関係は明らかであり、共伴を疑う余地がない。

従って、典型的な狭義の第５図３の様な多喜窪タイプは加曽利ＥⅠ式古段階に平行する土器群であることが理解される。

しかし、従来、多喜窪タイプの好例として編年対象に挙げられてきた八王子市狐塚遺跡（秋間･服部1971）では、加曽利ＥⅠ式古段階の土器は検出されておらず、その実態は不明瞭である。

戸田哲也氏は同じ八王子市内に存在する狐塚遺跡、滑坂遺跡（佐々木1988）、小田野遺跡（戸田1996）出土土器群を比較検討する中で、勝坂式終末段階に「狐塚遺跡第３号住居跡・滑坂遺跡第69号住居跡→加曽利ＥⅠ式古段階に狐塚遺跡第２号住居跡・滑坂遺跡第34号住居跡古・第12号住居跡古→曽利Ⅰ式段階に滑坂遺跡第52号住居跡・第12号住居跡新」の土器群を編年付けた（戸田1996）。これ等の土器群は、小田野遺跡出土土器群の型式学的分類と、住居跡出土土器群の対応関係で導き出されているが、小田野遺跡出土の加曽利ＥⅠ式古段階の土器は包含層出土であるため、その組成が明らかなわけではない。例示された住居跡からは、加曽利ＥⅠ式古段階の土器群は出土していない。

狐塚遺跡第３号住居跡（第７図１～７）から加曽利ＥⅠ式土器が出土していないことは先にも述べたが、第２号住居跡（第７図１～16）では13～16の加曽利Ｅ系土器が出土している。戸田氏によれば第２号住居跡が加曽利ＥⅠ式古段階に比定されているが、14のキャリパー形土器は加曽利ＥⅠ式最古段階の土器ではない。口縁部隆帯文の先端に見られる剣先文は、加曽利ＥⅠ式後半の新段階の様相を呈している。また、褶曲文の土器群（３、４、７、８）や、曽利式に近い土器群（11、12）を含むことから、加曽利ＥⅠ式後半の新段階に位置付けられる蓋然性が高い。この第２号住居跡の土器組成を一括的に把握が可能であれば、第２号住居跡出土土器は、加曽利ＥⅠ式後半段階に位置付けられる一括土器組成の可能性が高くなる。

また、狐塚遺跡第３号住居跡の第７図１、２と、駒木野遺跡第26ｂ住居跡第５図３、４が明確に分離できない以上、狐塚遺跡第３号住居跡を井戸尻Ⅱ式段階の加曽利ＥⅠ式古段階以前に位置付ける根拠は薄いものとなる。加曽利ＥⅠ式古段階並行期の土器群で、加曽利ＥⅠ式古段階の土器群を組成しない土器群と捕らえた方が、型式学的に理解しやすい。

しかし、一方で第３号住居跡４は円筒系タイプであるが、モチーフ構成がやや古相を帯びており、隆帯上の刻みなど比較的丁寧に行われている。これを根拠に井戸尻Ⅱ式段階を想定するとすれば、いまだ未検出の加曽利ＥⅠ式古段階住居跡の存在を想定し、第２号住居跡への変遷を想定しなければならない。

同様な現象は、滑坂遺跡（第６図）においても見られる。戸田氏が加曽利ＥⅠ式以前と位置付けた第69号住居跡（第６図１～13）と、ＥⅠ式並行とした第34号住居跡（第６図１～13）の間も、加曽利系の土器群で比較すると、１段階の空白を想定せざるを得ない。第34号住居跡出土土器群は加曽利ＥⅠ式新段階に想定され、曽利Ⅰ式と平行する段階と認識される。第12号住居跡（第６図１～10）も新旧の土器群を含むが、同様にＥⅠ式新段階かそれ以降に比定されるものが主体を占めていると考えられる。

実際の段階的な推移としては、両遺跡とも連続的であると思われる。滑坂遺跡では加曽利ＥⅠ式古段階の土器群を出土する住居跡も存在するが、組み合わせとして多喜窪タイプの土器群を都合よく組成することはない。また、真の加曽利ＥⅠ式古段階に組成する多喜窪系土器が明らかにならない以上、第69号住居跡のみＥⅠ式以前に位置付けるのは早計であろう。両者が共伴しない以上立証は難しいが、ＥⅠ式以前としての編年的位置付けが確定したとしても、その時間差、型式差はごく僅かで、微妙であることには違いがないであろう。

その差異が微妙であるとの判断は、飯能市加能里遺跡から導き出される。加能里遺跡は多喜窪タイプと加曽利ＥⅠ式古段階の共伴事例として前述した遺跡であるが、第20号住居跡と隣接して、第21号住居跡が存在

する。第21号住居跡からは多量の土器群（第４図１～24）が出土しており、第20号住居跡や中郷遺跡第８号住居跡で不明瞭であった甕形タイプが出土している。この甕形タイプ（４、６、７）や、頸部で膨らむタイプ（５）は所謂中峠式段階の特徴的な器形で、モチーフ間の充填要素もやや繁縟感がある。また、12の様に磨消モチーフを持つ土器も存在する。しかし、加曽利ＥⅠ式古段階土器も破片で出土しており、大枠では第20号住居跡と同様に、加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けられるものと思われるが、加曽利Ｅ系の土器群が混じりであるとすれば、若干古相を持つ土器群として抽出が可能である。

狐塚遺跡で空白の加曽利ＥⅠ式古段階の土器群が想定されるとすれば、まさに、加能里遺跡第20号住居跡出土土器群が相当し、それより古い狐塚遺跡第３号住居跡の段階には、加能理遺跡第21号住居跡出土土器が相当することになる。この程度の差異でなければ、所謂狭義の多喜窪タイプを区分することは難しいと考えられ、実際には同一段階と認識される。

従って、井戸尻Ⅱ式の櫛形文土器及び勝坂系の土器群は系統的に残存し変化形態を区分し難いが、少なくとも口縁部が強く屈曲し、算盤玉の底部を持つ狭義の多喜窪タイプは、加曽利ＥⅠ式古段階に平行する土器群として編年的位置付けを変更して置きたい。その最も典型例として、青梅市駒木野遺跡第26ｂ号住居跡の一括出土土器を挙げ、標準として置く。

以上の理由から、まま上遺跡第２号住居跡出土土器群は加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けられる可能性の高いことが、関係性の分析から把握されるのである。

（３）梨久保Ｂ式土器位置付けの再検討

まま上遺跡からは、直接的に梨久保Ｂ式に関わる資料は出土していないが、梨久保Ｂ式が加曽利ＥⅠ式初頭の平行型式と捉えられていることに対する問題点を提起して置きたい。

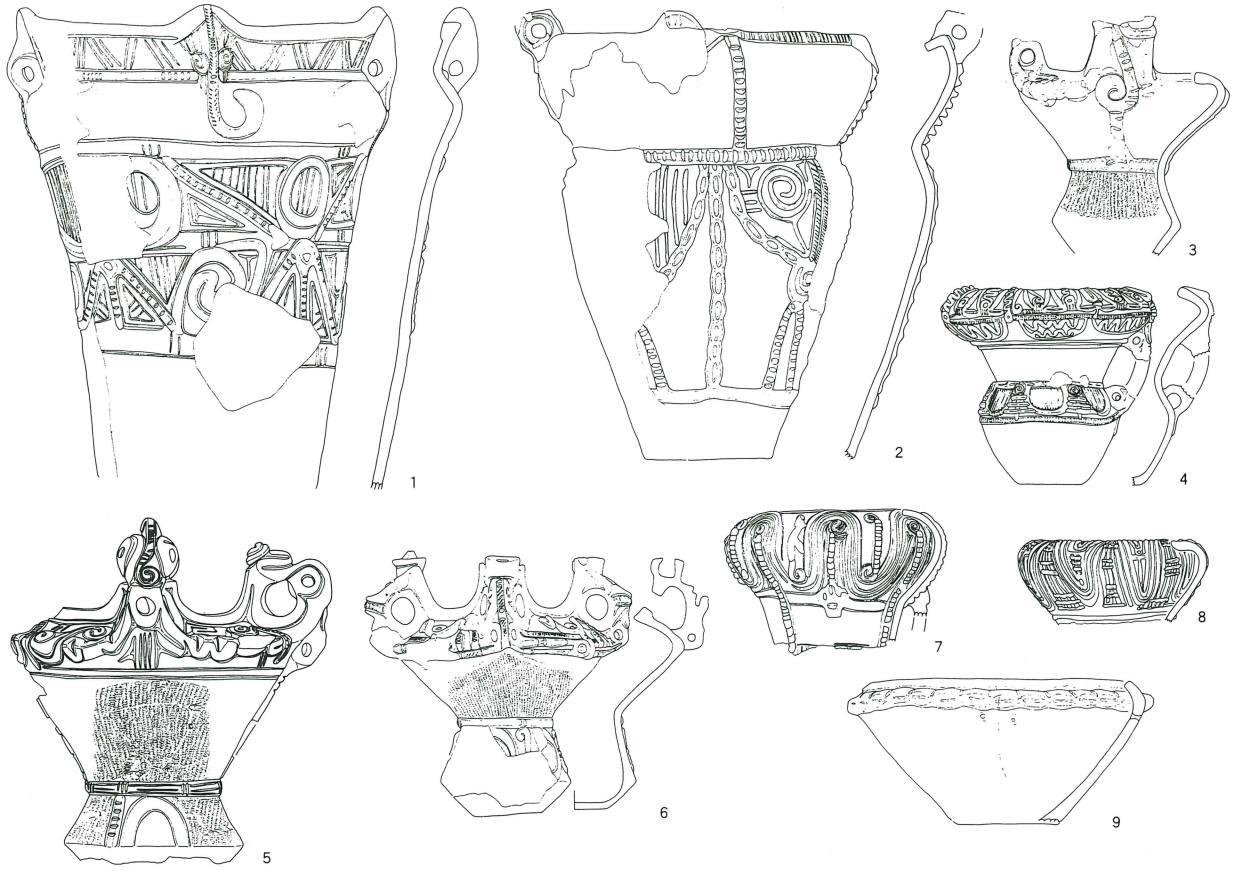
事業団編年では、加曽利ＥⅠ式と並行する中部高地の土器群として、井戸尻Ⅲ式相当の土器群を想定してきた。また、加曽利Ⅰ式中段階に、現在では加曽利ＥⅠ式新段階としているが、曽利Ⅰ式相当の土器群を想定してきた。中部高地においても地域的に構成の異なる土器群が存在し、勝坂式と加曽利ＥⅠ式接触地域の様相と同様に、一律の構成原理で律しきれない土器群が並存関係にあることが想定される。従って、井戸尻Ⅲ式とされる土器群が主体を占める地域、井戸尻Ⅲ式的要素が少なく、井戸尻Ⅱ式系統の土器群が新しい段階にまで存続する地域等が想定され、それ等に加曽利ＥⅠ式古段階の土器群が伴出する地域や、加曽利ＥⅠ式新段階の土器群から伴出する地域がある等、地域的様相を考慮して分析に当たる必要がある。

梨久保Ｂ式土器は梨久保遺跡第三・四次発掘調査報告で、第３・４号住居跡出土土器（第７図１～22）を指標とし、八ヶ岳西南麓の曽利Ⅰ式に並行する、諏訪盆地の在地土器型式として提唱された（宮坂1972）。近年、三上徹也氏によって型式内容の見直しが行われ、加曽利ＥⅠ式と並行する中期後半第Ⅰ期の資料として整備された（三上1996）。ここで、具体的な型式内容については立ち入らないが、組成する土器群に氏が指摘するように幾つかの系統要素があり、それが複合、または残存継承されて、梨久保Ｂ式段階の土器群を構成しており、少なくとも埼玉西部まで一部の要素が影響を与えていることは事実である。

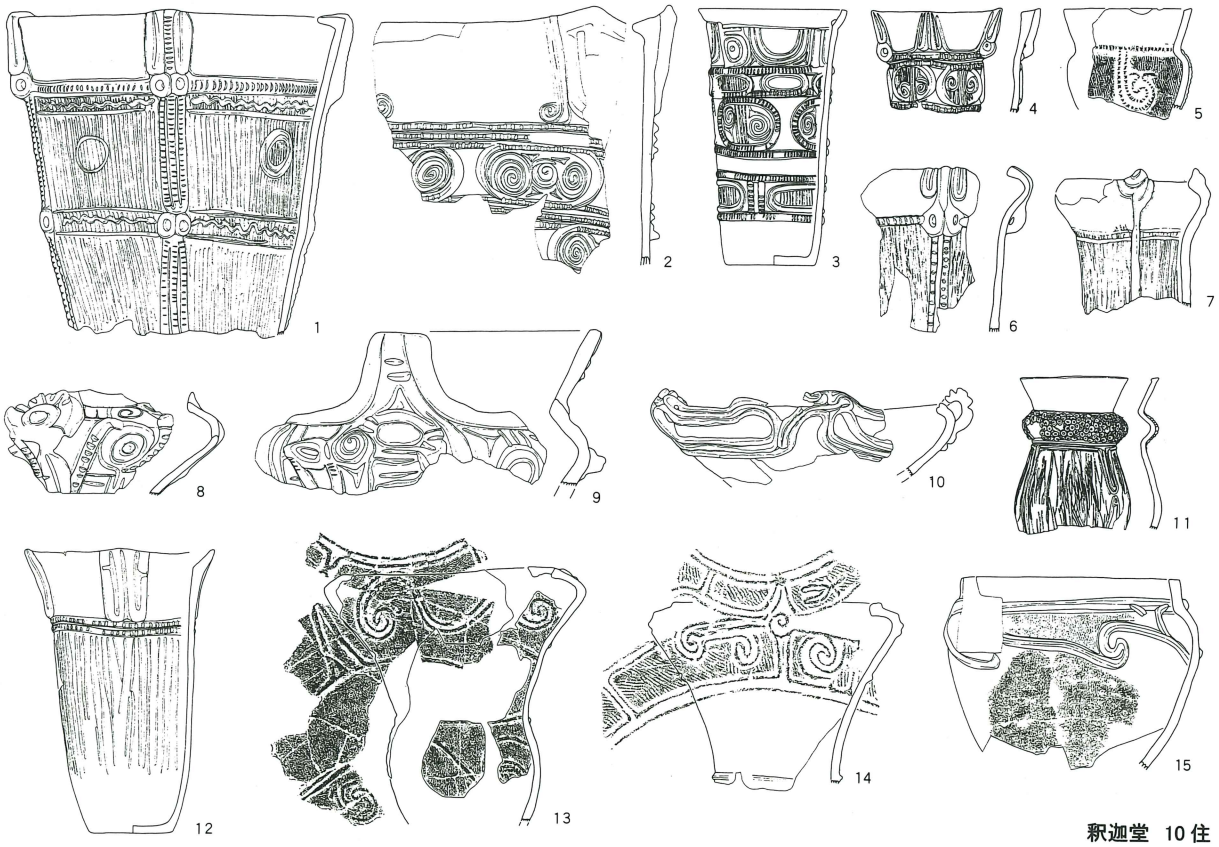
山梨県釈迦堂遺跡（長沢1987）第10号住居跡（第６図１～15）からは、多段の楕円区画を持つ井戸尻Ⅲ式に比定される円筒形タイプ（２～４）、多喜窪タイプ（８、９）、加曽利ＥⅠ式古段階の土器（13、14、15）が共伴しており、井戸尻Ⅲ式と加曽利ＥⅠ式古段階の並行関係が把握される。11は膨らむ頸部に円形貼付文を密に施文しており、この円形貼付文が駒木野遺跡第26ｂ号住居跡４の口縁部に施文するものと同類であることから、より並行関係の確かな土器群であることが理解される。また、円筒形土器１は胴部を「田」字状に区画しており、この構成は梨久保遺跡第３・４号住居跡の第７図６、17に受け継がれていく。

また、一の沢西遺跡（長沢1986）では、狭義の多喜

第８図　山梨県の土器群



一ノ沢　４住



釈迦堂　10住

窪タイプ（3、5、6）と、櫛形文土器から変形した褶曲文系の土器群（4、7、8）が出土しており、加曽利E系土器は出土していないが、EⅠ式古段階に比定される土器群と思われる。7、8の褶曲文は狐塚遺跡第2号住居跡の段階より古相を帯びている。さらに、櫛形文系土器4は口縁部に蛇行隆帯を挟む小さな褶曲文を施文するが、駒木野遺跡第26b号住居跡4は胴上半部に、この蛇行隆帯で大きな褶曲文を描いており、共通する要素を持っている。一の沢西遺跡は狐塚遺跡との比較からでも、EⅠ式古段階に位置付けられる可能性が高い。

この様に、例示資料は山梨県に偏ってしまったが、中部高地の加曽利EⅠ式古段階の土器群は、井戸尻Ⅲ式に比定されていた土器群、櫛形文土器の系譜を引く初期褶曲文土器を相当させることが妥当性を帯びていると言えよう。

ここで、加曽利EⅠ式を以って、中期後半と認識するのであれば、まさしく上記の土器群が中期後半初頭の土器群であることが理解される。梨久保B式の基準資料とされている梨久保遺跡第3・4号住居跡出土土器（第7図1～22）は、曽利式の要素を持つ2、完成した褶曲文を持つ土器15、16、「田」字状区画を持ち矢羽状沈線線を施文する17等が含まれており、一の沢西遺跡第4号住居跡より新しい段階の土器群であることは明瞭である。また、伴出する加曽利E系の土器（20、21）は、EⅠ式新段階に位置付けられる土器群である。さらに、梯子状文は、加曽利EⅠ新段階の土器群、例えば埼玉県飯能市加能里遺跡（富元1998）第15号住居跡出土土器の様に、この段階で特徴的に施文されるモチーフなのである。従って、梨久保遺跡第3・4号住居跡出土土器を指標とする梨久保B式土器は、少なくとも加曽利EⅠ式後半である新段階、もしくはそれ以降の段階に位置付けられる可能性が高いと言えよう。

（4）中峠式段階の土器群との関係

最後に、事業団編年で対象とした土器群の中で、現在、時間的関係及び系統関係が微妙であると認識した土器群について、加曽利EⅠ式からのアプローチで再検討を試みたい。

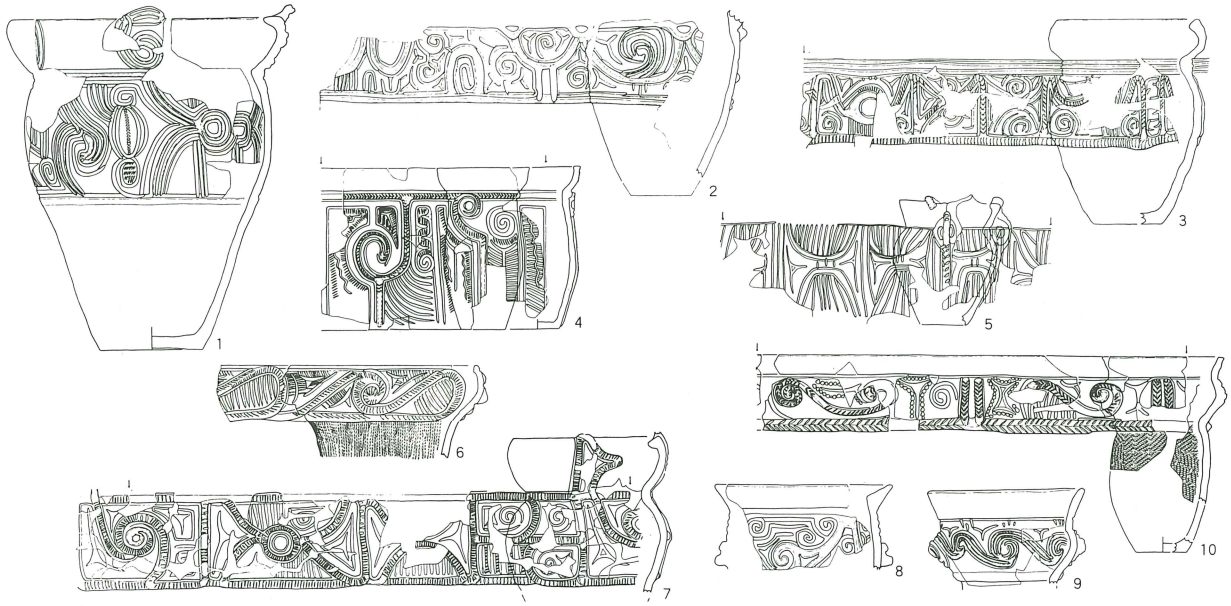
埼玉県北部に当たる台耕地遺跡（鈴木1983）第34号住居跡出土土器（第9図1～10）は、加曽利E式成立直前段階の所謂中峠式段階の指標として認識してきた土器群である。井戸尻Ⅱ式段階の土器群で、甕形タイプ（1、2、3、5、7）、キャリパー形タイプ（6）、無文の口唇部が立ち、口縁部の膨れる典型的な土器群（8～10）が存在する。区画内の充填文も4、6の様に爪形文を施文する例がある等、比較的繁縟な充填文を構成する。また、隆帯上の刻みも丁寧で、整然である。

県東部の大宮台地では、伊奈町原遺跡（村田1997）第13号住居跡出土土器（第10図1～5）、上尾市東町二丁目遺跡（浜野1987）第10号住居跡出土土器（第10図1～7）があり、何れも指標的な土器群が含まれている。原遺跡第13号住居跡は覆土が深く、土器群が大きく2層に分かれ、1～5はその下層から出土したものである。甕形タイプ1には爪形文を施文しており、安定した段階であることを示している。4は横S字状文を口縁部に5単位に巡らすもので、口縁部区画及び、隆帯上には2列の結節沈線を施文する。この住居跡の上層には、春日部市花積貝塚（城近1970）第2A号住居跡出土土器（第10図1～10）に類似する組成の、加曽利EⅠ式古段階の土器群が出土している。

東町二丁目遺跡第10号住居跡では、球形状の口縁部に、半弧状の貼付文を中心とした横位展開の沈線モチーフを持つ典型例1が出土している。他は、円筒形タイプであるが、モチーフ構成は比較的単純で、簡素化しているといえる。1が指標となって中峠式段階に位置付けられ、加曽利EⅠ式土器は伴わない。

しかし、本来、勝坂系の要素が強いと考えられる武蔵野台地において問題となるのは、所沢市膳棚遺跡（岩井1970）第12号住居跡出土土器群（第9図1～8）の構成である。7が炉体土器で、東町二丁目遺跡第10号住居跡1と同様に、中峠式の指標と認識されてきた土器である。しかし、覆土出土の円筒形タイプ3、4は、

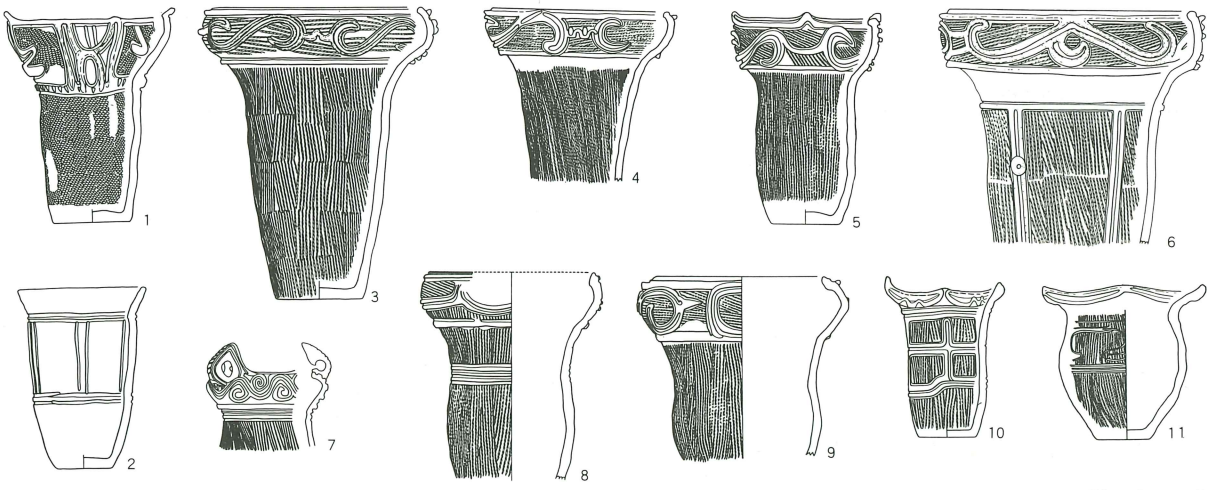
第９図　埼玉県北西部地区の土器群



台耕地　34 住

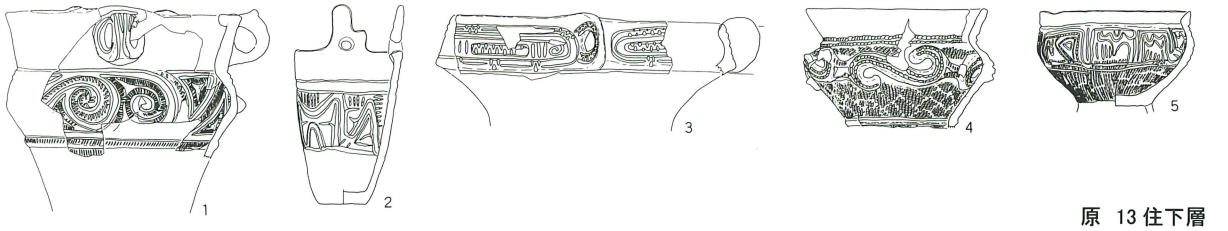


膳棚　12 住

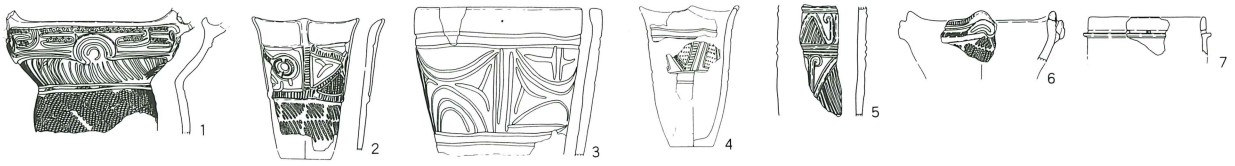


岩の上　23 住

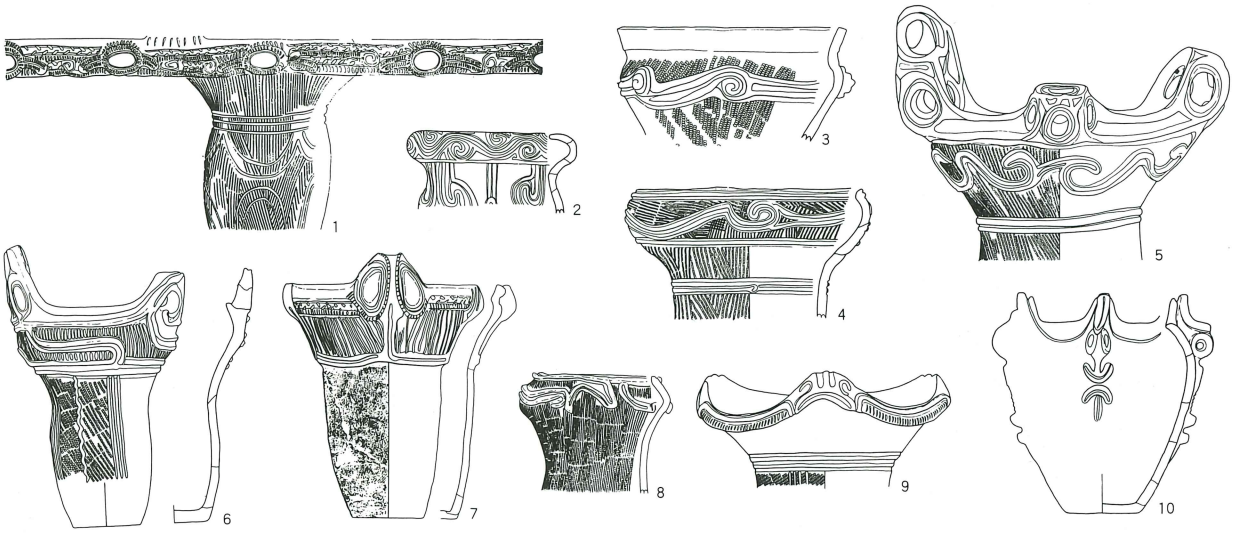
第10図　埼玉県東部地区の土器群



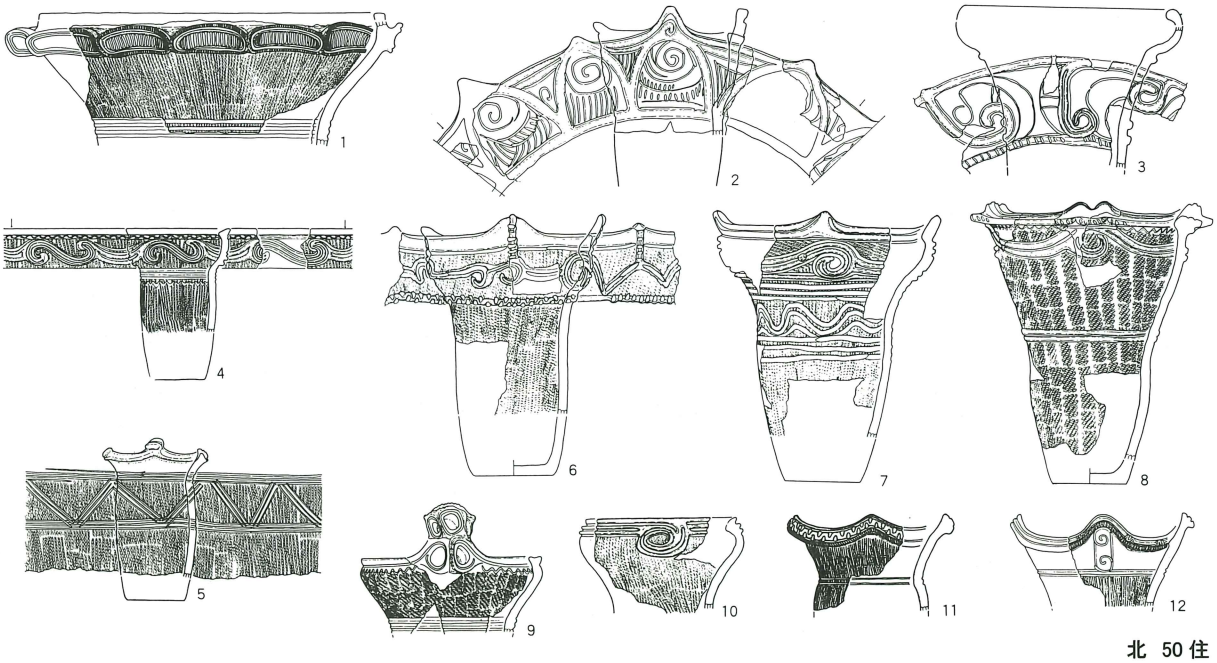
原　13 住下層



東町二丁目　10 住



花積貝塚　2A 住



北　50 住

区画内モチーフが簡略化しており、３の区画内沈線モチーフはまま上遺跡第５ｃ号住居跡２のモチーフと類似する。４は加能里遺跡第20・21号住居跡及び、中郷遺跡第８号住居跡出土の円筒形タイプと区分が不可能なほど簡略化している。井戸尻Ⅱ式段階の様相は、看取し難い。６は口縁部の隆帯による「十」字状区画文がまま上遺跡第２号住居跡４と共通し、中間に連結モチーフを持つなど、加曽利Ｅ式的構成が看取される。また、実測図では不明瞭であるが、頸部には半截竹管重複施文による３本沈線の区切り区画を行っている。この区画線は、まま上遺跡第５ｃ号住居跡１（第２図８）の頸部区画帯と酷似している。

更に、第９図１は口縁部の膨らみと、口唇部の唇状装飾が中峠式的であるが、モチーフを観察すると、口縁部は上向きの鍬状モチーフを４単位に構成するもので、その合わせ目から垂下する「Ｊ」字状の隆帯で器面を分割している。また、頸部は半截竹管重複施文による３本沈線を巡らして区画し、その中央部で小さくＳ字状に連結するモチーフを施文しており、手法及び構成が、岩の上遺跡（栗原1973）第23号住居跡出土土器（第９図１～11）10と酷似する。岩の上遺跡第23号住居跡10は東関東系タイプの土器で、半截竹管重複施文の３本沈線で「田」字状区画を施すものであり、その一部に膳棚遺跡第12号住居跡１と全く同種のアクセントを施文している。「田」字状の区画文も、同系列のモチーフと思われる。さらに、直線の隆帯に蛇行隆帯を沿わせた２本隆帯や、蛇行隆帯のみで胴部を区画しており、本来交互刺突隆帯を施文するところであるが、波状隆帯化している点に、新しい様相が看取される。

関連性が強いと考えられるまま上遺跡第２号住居跡出土土器や、第５ｃ号住居跡出土土器、岩の上遺跡第23号住居跡出土土器は、何れも加曽利ＥⅠ式古段階の土器群であり、少なくとも炉体土器の７とは時間差が看取される。炉体土器７は、他の土器群と確実に共伴関係にあるとすれば、中峠式の典型例と考えられていたとしても、新しくＥⅠ式古段階の土器群にまで下げて考えざるを得ない状況となる。

従って、膳棚遺跡第12号住居跡出土土器群は、少なくとも炉体土器以外は、加曽利ＥⅠ式古段階に相当するものとしての編年的な位置付けを再検討すべきであると考える。場合によっては、炉体土器７も該当する可能性があることも指摘しておきたい。

その理由は、大宮台地における中峠式段階と認識されている土器群と、伴出する加曽利Ｅ系土器群との関係が、膳棚遺跡事例に示唆的であるからである。

先ず、花積貝塚第２Ａ号住居跡出土の第10図１は、口縁部文様帯の楕円区画と、胴部の上下対弧文を理由として中峠式に比定される場合が多い。大村裕氏は中峠式土器を再検討する中で、北遺跡第50号住居跡（金子1987）の炉体土器１と同様に、第10図１を中峠式の標識的土器に認定した（大村1998）。かつて、筆者が北遺跡を報告した際に、第50号住居跡出土土器を炉体土器を含めて、加曽利ＥⅠ式古段階における良好な一括組成と評価した。勝坂系の第10図２はまま上遺跡第５ｃ号住居跡２と同様な様相を示しており、大木８ａ系的土器（８）や東関東系タイプ（11、12）が含まれていて、今日的にも編年的位置付けに変更の必要がないものと捉えている。１の炉体土器が井戸尻Ⅱ式段階におけるの中峠式であれば、原遺跡第13号住居跡１、４の様な土器群が伴っていてもよい。また、花積貝塚第２Ａ号住居跡の一括土器の中でも、１と共伴すると考えられる井戸尻Ⅱ式段階の土器は存在していない。

つまり、膳棚遺跡第12号住居跡、花積貝塚２Ａ号住居跡、北遺跡第50号住居跡は、炉体土器等に中峠式と考えられる土器が１点ずつ含まれている事になり、他は全て加曽利ＥⅠ式古段階の土器群で構成されていることになる。問題とされる土器は中峠式系の土器であることは明白であるが、その編年的位置付けに誤りがある可能性がある。従って、井戸尻Ⅱ式段階の中峠式土器ではなく、加曽利ＥⅠ式古段階の中峠系土器として位置付けられる可能性が指摘されるのである。実際、三原田式土器群の中にも新旧の土器群が指摘されている（山下1998）等、系統的な変化系列が存在している

場合が多い。また、炉体土器と覆土出土土器という、絶対的な時間差を主張するのであれば、固体一つで時期を決めるのではなく、それを含む土器組成を明らかにしていく必要があろう。その時、絶対的時間差ではなく相対的時間差を相手に物事を思考していることに気付くはずである。

以上、まま上遺跡出土土器を中心にして加曽利ＥⅠ式成立期の様相について検討し、編年的ずれが生じていると感じられる部分について私見を述べてきた。検討事例で示してきた様に、土器群の残存形態の認識や、非共伴土器群の型式学的な共時性把握には、充分な方法論が確立していないが、まだまだ、検討の余地を充分残しており、更なる探求を続けていきたいと考えている。また、今回検討した部分については、機会を改めて再度検討し直して見たいと考えている。

参考文献

秋間健郎・服部敬史 1971「東京都狐塚遺跡の調査」長野県考古学会誌第11号
伊藤博司他 1998「駒木野遺跡発掘調査報告書」青梅市遺跡調査会
稲田孝司 1972「縄文式土器文様発達史　素描・上」 考古学研究72
岩井住男他 1970「膳棚」鳳翔７号　埼玉大学考古学研究会
大村　裕 1998「中峠式土器の再検討」第11回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相
金子直行 1987「北・八幡谷・相野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集
木村　功 1995「まま上４次・白綾３次・まま上６次・延命寺北２次」毛呂山町埋蔵文化財調査報告第11集
栗原文蔵 1973「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第１集
小林達雄 1988「縄文土器大観２　中期Ⅰ」小学館
小林達雄 1986「土器文様が語る縄文人の世界観」『宇宙への祈り』日本古代史３
小林謙一 2000「縄紋中期土器の文様割付の研究」日本考古学第10号
坂上克弘他 2000「大熊仲町遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告26
佐々木克典他 1988「南八王子地区遺跡調査報告４　滑坂遺跡」八王子市南部地区遺跡調査会
城近憲市 1970「花積貝塚発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第15集
鈴木敏昭 1983「縄文土器の施文構造に関する一考察－加曽利Ｅ式土器を媒介として（序）－」信濃第35巻第４号
鈴木敏昭 1983「台耕地（Ⅰ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
谷井　彪 1979「縄文土器の単位とその意味（上）・(下)」古代文化31－２・３
谷井　彪他 1982「縄文中期土器群の再編」埼玉県埋蔵文化調査事業団紀要1982
戸田哲也 1996「東京都八王子市　小田野遺跡発掘調査報告書」小田野遺跡発掘調査団
富元久美子 1998「飯能の遺跡（25） 加能里遺跡第16・20・21次調査」飯能市教育委員会
長沢宏昌 1986「一の沢西遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第16集
長沢宏昌 1987「釈迦堂Ⅲ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集
浜野美代子 1997「東町二丁目遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第186集
三上徹也 1996「花上寺遺跡」郷土の文化財19　岡谷市教育委員会
宮坂光昭 1972「梨久保遺跡　長野県岡谷市梨久保遺跡第三・四次発掘調査報告」郷土の文化財６
村田章人 1997「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
柳戸信吾 1998「飯能の遺跡（26） 中郷遺跡第１～３次調査」飯能市教育委員会
山下歳信 1998「群馬県の中期中葉から後葉の様相」第11回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相